言語社会研究科　博士審査要旨

論 文 提 出 者　　比嘉　徹徳
論　文　題　目　　フロイトの情熱――精神分析運動と芸術
論文審査委員　　鵜飼哲　久保哲司　十川幸司

１．　本論文の構成

本論文はジクムント・フロイトと彼が創始した精神分析という治療実践との特異な関係性を、フロイトおよび精神分析第一世代の他の分析家たちの著作、書簡等第一次資料を中心に再検討し、フロイトの芸術観に即してこの問いの解明を試みた、精神分析、哲学、美学、歴史学を架橋する領域横断的な研究である。

本論文は次の各章から構成される。

序論　情熱の理路
　「フロイトの体験」の反復としての精神分析
第I部　運動としての精神分析
　第１章　運動主体の構築：権威をめぐって
　　精神分析運動の原光景
　　権威の伝達
　　フロイトの自己分析
　　権威の寓話
　　ゲリラ戦
　　フロイトの大義
　第２章　精神分析の制度化とその不可能性
　　転移の価値づけ
　　職業としての精神分析
　　制度化の不可能性
第２部　起源のプログラム
　第３章オイディプスと夢の舞台
　　無媒介的表象のアポリア
　　願望充足の位階秩序
　　夢作業と喩
　　「夢作業は考えない」
　　仮託と模倣
　　オイディプスの欲動
第３部　真理と陶酔

第４章　成功したパラノイア
フロイトのシュレーバー症例解釈
パラノイアとオリジナリティの不安
パラノイアの嫌疑
分析的素質
第５章　「歴史小説」における真理
「歴史小説」
「歴史的真理」の構成
ネットワーク
欲動断念
陶酔

補遺［翻訳転載］
A. 国際精神分析協会規約(1910)
B. ベルリン精神分析協会　授業・養成活動一般のための要綱(1918)

参考文献

２　本論文の概要

本研究は、５つの章を通じて、ジクムント・フロイトが開始した精神分析の特異性を明らかにしようとする。その特異性は、精神分析がフロイトという固有名と結びついているということ、フロイトの自己分析的・自伝的要素との内在的つながりを含み持っていることに起因する。この精神分析の特異な構造にアプローチするために、本研究は、フロイトが精神分析を「運動」として展開したのはなぜかという問いを立て、さらに、精神分析の根幹のアイディアに芸術（詩、小説、彫刻、音楽）への参照があることの意味を考察する。とりわけ著者が注目するのは、精神分析と呼びうる実践を開始し著作を公にしていたフロイトが、ある時点で、それを「運動」として再定義し再始動しようとするときに彼を動かしていた情熱（欲望）の内実である。精神分析運動は団体（協会）を作り定期刊行物を発行することによって精神分析への理解を深め発展させるだけでなく、同時に精神分析家を再生産することを目指していた。その反面、精神分析という営為とフロイトという個人の分かちがたい関係は、精神分析運動の原動力であったばかりでなく、その制度化に抵抗する要素でもあったと著者は主張する。

序論では精神分析の「構造」に焦点が絞られる。精神医学史家のアンリ・エランベルジェの著作『無意識の発見』によれば、精神分析はフロイト自身の「創造の病」を反復するという構造をそなえている点で他の精神療法と根本的に異なっている。本論文は、この洞察を手がかりに、「創造の病い」における「多形的状態」としてフロイトの体験を捉え直し、その反復として精神分析が伝達されることに「運動」としてのこの営為のアポリアがあることを重視する。本論文が多様な角度から分析を試みるのは、フロイトが精神分析にかけた「情熱」が、このアポリアを通して

伝達される様態であると言えよう。

第１章ではフロイトの１９１４年の著作『精神分析運動の歴史のために』を中心に、精神分析とはフロイト自身の体験を遂行的に辿り直す営為であることを確認する。フロイトによれば精神分析は「体系的」な記述によってその本質を明らかにすることはできず、そのためにはかならずその「生成史」を参照しなければならない。このテクストが書かれたのは精神分析運動に早くも大きな決裂が生じた第４回の精神分析協会ミュンヘン大会(1913)の直後であり、著者によればここで精神分析運動の「主体」の構築が目指されることになる。精神分析を担いうる「主体」の起源についてのフロイトの語りがこれ以上遡行し得ない起源に到達するとき、精神分析という営為が依拠しうる「権威」の問題が浮き彫りになる。このとき精神分析の組織内部にフロイトを中心とした「秘密委員会」が結成されるが、それは精神分析運動の拡大によって精神分析が変質していくことを危機として認識した者たちが、「フロイトの精神分析」の純粋性の擁護を図ったものであった。著者はこの委員会内の議論で「権威」に代わって「大義」という言葉が使われるようになることに着目し、フロイトと精神分析という「学 」の距離、そしてこの距離によって生じる伝達の問題を検討する。精神分析運動が依拠すべき「権威」あるいは「大義」はフロイトの自己分析に帰着する。しかしフロイトの一回性の分析経験は、「科学」たろうとする、あるいは制度化しようとする精神分析にとって、取り除くことのできない「染み」のようなものとして残留するのである。

第２章では、フロイトの反復概念が精神分析の技法論を通して検討される。フロイトは、彼自身を超えて精神分析が生き残ることを欲していたのであり。死を予期するに至った時期に制度化への意志を明確にする。フロイトが精神分析のセッションについて記述し直すとき、著者によれば、そこにはこれから精神分析運動に加わるであろう未知の他者たちへの呼びかけが聞き取れる。とりわけ、転移という基本概念の彫琢過程で反復という現象の把握が次第に変化していくことを著者は緻密に追跡する。病因となった出来事を想起し言語化することが一方において分析的治療の根幹とされつつも、他方では、分析空間で起こることのすべてが、それが実際に起きたか否かとは独立して、あるなにごとかの「反復」として分析の対象となるのである。分析空間という患者自身とその人生との「中間領域」で起こることは、真偽を超えた「アクチュアル」な事態として規定される。このようなセッションの方法の具体的な記述は、そのまま、職業としての精神分析についてのフロイトの所信の披瀝とみなしうる。そして、精神分析の職業化を論じたサラ・ウィンターの論述を参照しつつ、著者は、フロイトがここで、制度化と職業化に抵抗する要素にも同時に言及していることを強調するのである。すなわちそれは、治療の成果を超えたところにあると想定されるフロイトの「真理」への執着である。

本論文の第２部および第３部ではこの「真理」の内実の解明が目指される。そのために著者は、初期のテクストである『夢解釈』と、最晩年のテクストである『モーセという男と一神教』を、相互に対照させつつ独自のアプローチを試みる。

心的なものの「真理」に到達するためにフロイトは自由連想という方法を用いたが、『夢解釈』でフロイトは、自由連想をシラーの詩作の態度と結びつけて説明している。ここから著者は、精神分析にとって芸術は単なる模範やアナロジー以上のものであると主張する。その理由は、夢が

映像を作り出しドラマ化する仕方が、フロイトの「夢作業」論の中心的課題となっていることにある。この点を踏まえて著者は、「夢作業」を、ニーチェの『悲劇の誕生』における「意志」の働きと対照させつつ論じていく。「意志」はそこでは音楽的なもの、すなわちディオニュソス的なものを、形象化し映像化するアポロ的なものにつなぐ機能を担っているが、「夢作業」は何より映像化とドラマ化に関わるものである。一連の先行研究において、「夢作業」は、隠喩や換喩といった言語的操作に還元されて理解されてきたのに対し、著者は、フロイトが映像化とドラマ化の視点を強調していることに特別な注意を払う。このように見た場合に初めて、フロイトが「夢の願望充足」説を、快の体験の反復を目指すものとする一方で、映像化し演劇化すること自体の快にも言及していることが理解される。そのとき必然的に前景化されるのは模倣の願望であり、フロイトはそれを子どもの遊びと同じものと考える。そして、夢ならびに遊びにおけるこの模倣という契機、すなわち現実に仮託しつつ現実とは別の世界を作ることに、フロイトは智者としてのオイディプスの姿を重ね合わせる。すなわち、幼児における模倣の欲望は「知識欲動」によって駆動されるものであり、それこそはスフィンクスの謎を解いたオイディプスを動かしていたものであるとされるのである。

続いて第４章では、フロイトによるパラノイア論と精神分析の方法が比較検討される。フロイトがドレスデン控訴院判事ダニエル・パウル・シュレーバーの『回想録』を読んだ上で執筆したパラノイア論の成立は前述の『運動史』の時期と重なっている。フロイトが精神分析を開始した地点におけるフロイト自身のパラノイアの問題がここに暗示される。フロイトはヒステリーの性的病因説によって『ヒステリー研究』の共著者であるヨーゼフ・ブロイアーと決裂したが、ブロイアーはこのとき、フロイトの思想を、すべてを単一の原因に還元する「科学的パラノイア」であると断じた。その一方でフロイトは、盟友ヴィルヘルム・フリースが彼に書き送った諸々のアイディアを、最終的に「パラノイア的」であると退けていた。そして後年、フロイトは、シャーンドル・フェレンツィ宛の手紙で、「パラノイアが失敗するところで私は成功した」と明言する。こうした事実を踏まえ著者は、精神分析の歴史にパラノイア的なものは終始憑きまとい続けていると指摘する。シュレーバー論のフロイトは、同性愛の否認がパラノイア的妄想を生み出すと主張する。この主張を支えているのは、投影のメカニズムによって愛する同性が迫害者としてパラノイア患者を脅かすという洞察である。他方、人々の振る舞いの細部や事物の微かな徴候から遠大な帰結を引き出す思考過程も、フロイトによってパラノイアとして論じられていた。著者は、こうした諸例でフロイトがパラノイア的と診断する傾向は、精神分析の方法と著しい類似性を持つと指摘する。『ミケランジェロのモーセ』でフロイトは、彫像の細部を異常なまでに掘り下げて検討するが、この点を踏まえつつ著者は、精神分析がパラノイアからどう距離を取ろうとしたのかを分析するのである。

フロイトがミケランジェロの彫像から読みとったのは歴史上のモーセとは異なる非実在のモーセであった。そしてフロイトは、その最晩年にみずから聖書上の記述と異なるモーセ像を描き出すことになる。『モーセという男と一神教』は、モーセ・エジプト人説やユダヤ人によるモーセ殺害説など、さまざまな挑発的なテーゼを含んでいる。多くの論者はこのテクストの読解の鍵をフロイトの生活史に求めてきた。著者はユダヤ史家のヨーゼフ・ハイム・イェルシャルミによ

る研究『フロイトのモーセ―終わりあるユダヤ教と終わりなきユダヤ教』を取り上げ、批判的に検討しつつ、フロイトが「歴史小説」の名のもとに、精神分析的な「再構成」という方法を用いて一神教の歴史にアプローチしていることを論証する。著者によればそれは、『ミケランジェロのモーセ』でかつて行った作業を、反省的自覚を持って反復することであった。フロイトが語るのは、ことさらに「本当らしくない」、構成されたフィクションとしての「真理」である。このような「真理」はパラノイア的妄想に限りなく接近するかに見える。そのことを自覚しつつなお、フロイトは「真理」を求めて止まないのであり。著者はそこに、フロイトにとっての精神分析を駆動している「情熱」の本質を認めるのである。

著者はさらに、この再構成という作業によって、フロイトが「ユダヤ的なもの」をどのように描き出しているかを検討する。フロイトは一神教を、欲動断念を強いる倫理的な宗教であると考え、それを通じて高度な「精神性」が獲得されると主張する。そして、この快（感覚性）の断念の中には特殊な快が含まれていることに注意する。フロイトはこの快を「陶酔」と呼ぶが、著者はこの「陶酔」が男性的なものではなく、偶像崇拝から神の観念を切断する一神教の誕生に、消去不可能な「物質性」、言い換えれば「母」的なものが付着していることを指摘する。また、ここで一義的に問題になっているのはユダヤ人の特殊性ではなくユーモアにおいて体験される情動であり、フロイトの本来の関心は欲動断念に至る心的機制にこそあったと主張する。

以上五章の考察を通じて、本論文は、創始者フロイトと精神分析という営為の間に存在する特異な関係に様々な角度から綿密な分析を加えた。そして、フロイトという名は精神分析にとって「消去不可能な外部」と呼びうるものであり、彼が精神分析に傾けた「情熱」は、真理への衝迫と芸術における欲動のあり方に範を取ったものであったと結論する。

３　本論文の成果と問題点

本論文の成果は第一に、フロイトおよび精神分析初期の分析家たちの著作および書簡という一次資料を丹念に読み込み、治療実践、理論および運動という精神分析の異質な諸側面の間の関係に丁寧に光を当てて、この営為の内在的、創造的矛盾と呼びうるものを説得力豊かに描き出した点にある。とりわけ１９１４年の制度的危機とそこから生まれた「秘密委員会」の活動の詳細な分析は、精神分析史の理解に独創的な貢献を行ったものと言えよう。

第二に、「精神分析の情熱」というタイトルのもとに、フリースとの往復書簡を通したフロイトの自己分析から出発し、パラノイア論を経て、晩年の著作に現れる「陶酔」という言葉に至る概念的系譜の糸を綿密にたどることによって、精神分析運動を担う主体の核心に働く特異な情動の存在を明るみに出したことである。この作業はジャック・ラカンが提起した「分析家の欲望」という問題設定と重なるものであるが、この情動の「女性」的（母性的）性格に触れている点に特に重要な独創性が認められる。

第三に、フロイトが芸術作品を論じた著作に着目し、そこに精神分析理論の美学への応用ではなく、精神分析の形成過程に不可欠であった着想源を見ることによって、この営為の自己規定に固有の困難さの分析を可能にしたことである。とりわけ、「ミケランジェロのモーセ」と『モー

セという男と一神教』という２つのモーセ論の関係をパラノイア論との関連で再考し、「歴史的真理」という概念の新たな理解にまで導いた手際は見事である。

とはいえ、本研究にもいくつかの問題点は存在する。

第一に、文献の細部の検討に集中するあまり、論文全体の骨格がともすると見え難く、精神分析運動史の再検討を主とする前半と、芸術論や宗教史にかかわる後半との関連の把握がやや困難なことが挙げられる。多少の反復を厭わず、最初に全体の作業の見取り図を提示するとともに、結論でも各章の要約と今後の課題の明示などを加えることによって、この構造上の問題点を修正することができよう。

第二に、精神分析の実践および理論において重要な「反復」概念の理解において、本論文では「オリジナルなき反復」という解釈が示されているが、分析空間の特質の記述としてこの解釈にはなお不明瞭な部分が残る。この点は、今後さらに掘り下げて検討されることが望ましい。

しかし、これらの問題点は、本論文が全体として達成した成果にくらべれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることにかわりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果要旨

2011年2月9日

受験者　　比嘉徹徳
最終試験委員　　鵜飼哲　久保哲司　十川幸司

2011年1月31日、学位請求論文提出者　比嘉徹徳氏の論文および関連分野について、本学学位規定第８条第１項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文『フロイトの情熱―精神分析運動と芸術』に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、比嘉徹徳氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、比嘉徹徳氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。